

同志社大学人文科学研究所 第80回公開講演会 / 国際シンポジウム

カリマンタン/ボルネオにおける アブラヤシ農園拡大とその影響

— 生産システム・地域社会・熱帯林保護 —

2013年 2月23日 土 13:30~18:30 開場13:00
~関連DVD上映

入場無料
申込不要

同志社大学今出川キャンパス 明德館1番教室

(京都市営地下鉄烏丸線「今出川」駅下車)



✓ 林田秀樹 (同志社大学人文科学研究所准教授)

「アブラヤシ生産システムの変容が意味するもの —西カリマンタン州の事例から—」

✓ 加藤 剛 (京都大学名誉教授・総合地球環境学研究所客員教授)

「商業作物中心の経済は何をもたらしたか —西カリマンタンの地域社会を考える—」

✓ Herman Hidayat (ヘルマン ヒダヤット) (インドネシア科学院 社会文化研究センター上席研究員)

「開発vs.保護—カリマンタン/ボルネオ中心部におけるアブラヤシ農園問題の再検討—」
(通訳あり)

● <コメンテーター> 永田淳嗣 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)

主催・お問合せ：同志社大学人文科学研究所 075-251-3940 / ji-jimbn@mail.doshisha.ac.jp
協賛・助成：サントリー文化財団、京都大学地域研究統合情報センター
協力：京都大学東南アジア研究所、京都外国語専門学校

カリマンタン/ボルネオにおける アブラヤシ農園拡大とその影響

—生産システム・地域社会・熱帯林保護—

マレーシアを先発国として開発が進められてきたアブラヤシ農園は、1990年代後半以降、同国並びにインドネシアで急速に拡大してきた。その面積は直近の15年間ほどでほぼ倍増し、現在ではおよそ1,400万haにも及んでいる。日本の国土面積と比較すれば、3分の1を上回る規模である。そしてこのことは、現地の森林消失を加速させることで、現地住民の伝統的生活や森林に生息する動植物の多様性に否定的影響を及ぼしているとして、批判的に取り上げられることが多い。こうした現象を引起している要因をどのように理解するか、現象そのものをどう評価するか、そして問題が生じているのであればそれをどのように解決していくかが、現地の人々だけでなく、事態に関心を寄せる私たちの課題となっている。

今回取り上げるカリマンタン島（ボルネオ島）は、上述のようなアブラヤシ農園の拡大傾向がこの間とりわけ顕著で、いわば「フロンティア」として注目されてきた地域である。林田秀樹と加藤剛は2010年から、「アブラヤシ研究会」という研究プロジェクトのメンバーとして、インドネシア・西カリマンタン州で現地調査を続けてきた。またヘルマン・ヒダヤットは、それ以前から同国東カリマンタン州、並びにマレーシア・サバ州、サラワク州で森林保護問題の調査を進め数多くの現場を踏査してきた。本シンポジウムでは、3人の調査研究報告から、「アブラヤシ農園拡大のフロンティア」としてのカリマンタン/ボルネオの現在の姿を、農園でのアブラヤシ生産システム、地域社会、熱帯林保護の各側面に及んだ影響から浮かび上がらせ、上述の課題に取り組む際の手掛かりについてご来場の皆さんとともに考えたい。

アブラヤシ生産システムの変容が意味するもの—西カリマンタン州の事例から

林田 秀樹（同志社大学人文科学研究所准教授）

インドネシア・西カリマンタン州におけるアブラヤシ農園開発は、1980年代初頭に国营農園企業によって始められた。以後約30年が経過するなかで、インドネシアにおけるアブラヤシ農園開発の先発地・スマトラで生じてきた傾向と同様に西カリマンタンにおいても、民営農園企業による開発がより活発に進められてきたことで国营農園のプレゼンスは相対的に後退してきている。しかし、本講演で取り上げる同州所在の国营農園とその周辺では、近年いくつかの注目すべき動向がみられる。そしてこれらの動向は、いずれも「中核企業-小農（PIR）システム」というアブラヤシ及びパーム原油の生産システムの変化に関連して生じているものである。

本講演では、まず、上記のPIRというシステムの概要と制度化の経緯について解説し、それが現在どのように変容を遂げつつあるかに関して、西カリマンタン州サンガウ県の国营農園を事例に報告する。そして、そのPIRシステムの変容は、当事者である2つの経済主体、農園企業と小農の間関係にとって、あるいはアブラヤシ-パーム油関連産業の持続可能性にとってどのような意味をもっているか、について論じる。特に、日本では育たない作物種であるアブラヤシを栽培し、日本ではつくれない製品・パーム油を生産してはいるが、日本に住む私たちが大きく変わらない動機で働いている小農たちの姿を紹介しながら、PIRシステムの変容の意味を問いたいと考えている。

商業作物中心の経済は何をもたらしたか—西カリマンタンの地域社会を考える

加藤 剛 (京都大学名誉教授・総合地球環境学研究所客員教授)

本発表の舞台ンガバン地域は、西カリマンタン州の州都ポンティアナックから内陸に280キロ、自動車に乗り約5時間の距離に位置する。かつてはカリマンタン島に多く住むダヤック系の少数民族が主として居住し、1980年代以前は河川航行以外の交通手段はあまり重要ではなかった。主たる生業は焼畑稲作とロタン（籐）・香木などの森林産物の採取で、前者は自給され後者は中国人商人などに売られた。20世紀初頭になるとカリマンタン島ではゴム・プランテーションが拡大し、やがてゴム樹はダヤック人により小農作物として栽培されるようになり、焼畑稲作と並び2大生業となった。この意味で、ンガバン地域のダヤック人と商業作物との関わりは100年前後の歴史を持つ。その後、「大農園＝小農結合型プランテーション」開発とも呼べる全国的プロジェクト「PIRシステム」の下で、1982年から88年にかけてンガバンにもアブラヤシ栽培が導入された。当初10年ほどは、未知の商業作物を協同組合という未経験の組織を介し、国営大農園の指導下で栽培するという小農アブラヤシ農家の育成は、スハルト政権崩壊による政治経済的混乱もあり確たる成果をみなかった。だが2000年代になると、移民農家の成功やアブラヤシ油価格の高騰もあって定着するようになり、今やンガバン地域の経済はアブラヤシを抜きに語ることはできない。アブラヤシ中心の経済の進展は地域社会にどのような変化をもたらしたのか——この問題についてンガバンを事例に考えてみたい。

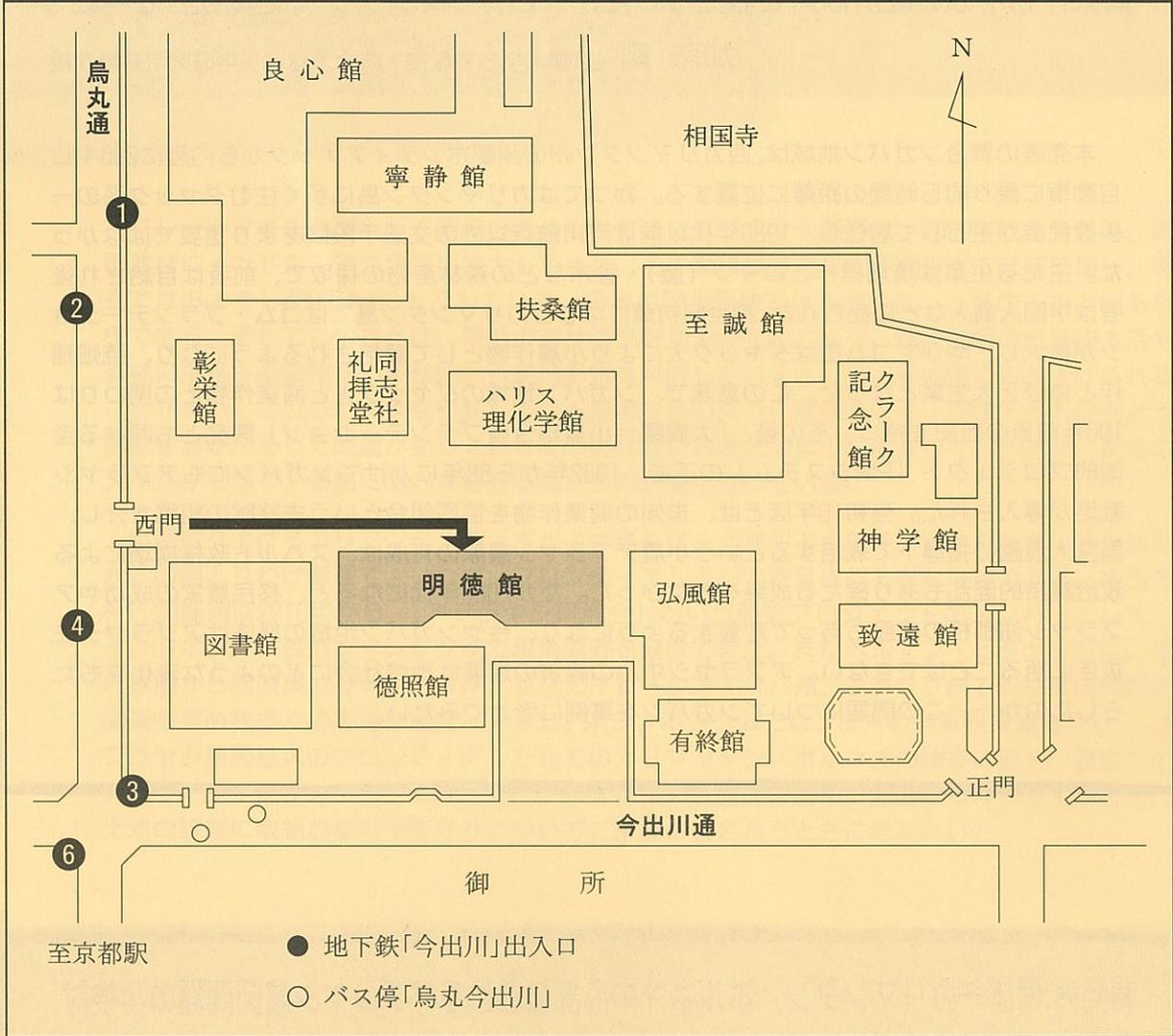
開発vs.保護—カリマンタン／ボルネオ中心部におけるアブラヤシ農園問題の再検討

Herman Hidayat (インドネシア科学院社会文化研究センター上席研究員)

インドネシアでは、2005年にカリマンタン／ボルネオにおけるインドネシア-マレーシア間の国境地帯に焦点を当てた「アブラヤシ・メガプロジェクト」が開始された。これは、同年4月北京で行われたユドヨノ大統領-胡錦濤主席会談で持ち上がった話である。その際、中国・国家開発銀行は、中国企業による対インドネシア投資、とりわけアブラヤシ農園部門への投資の円滑化のための資金供与を行うことになったといわれている。このような「開発」は、外貨を稼得するうえで有効な事業であり、地方には雇用と現金所得を、中央政府には巨額の税収をもたらすものである。

一方、表題のもう一つの言葉「保護」が意味するものは何だろうか。それは、現地住民の生計手段、生物多様性、水質等の環境の保護であり、当地ではKayan Mentaran、Bihun Karihun等の国立公園において実践されてきた。また、「カリマンタン／ボルネオ中心部 (the Heart of Kalimantan/Borneo)」とは、森林の劣化・消失を既存の保護地域を拡大しながらよりよく管理し、複数の保護地域をつなぎ、持続可能な森林利用を広めることで生物多様性保護を促進することを目的に設定されているものである。いくつかのNGOは、ボルネオ中心部におけるアブラヤシ農園開発が、ボルネオ中心部周辺に源を発する多くの河川の水質や低地部での洪水の発生リスクに与える影響に懸念を表明している。本講演では、こうした「開発」する側のプロジェクトに対し「保護」する側の現地住民・NGOがどのような活動を繰り広げてきたかについて紹介し、議論したい。

同志社大学今出川キャンパス案内図



▼最寄駅 <京都市営地下鉄烏丸線「今出川」駅> へは

J R 「京都」駅から地下鉄烏丸線に乗換

京阪・叡電 「出町柳」駅より西へ徒歩15分、または市バス201号・203号で約5分

近鉄 「竹田」駅から地下鉄烏丸線に乗換

阪急 「烏丸」駅から地下鉄烏丸線に乗換

会場へは公共交通機関をご利用ください

【駐車場はありませんので、自家用車でのご来場はご遠慮ください】